

## 事の本質を見極め、 「臥薪嘗胆」の心で頑張ろう

今年度もあとわずかになりました。あっという間に新年度、新学期を迎えることになると思います。3月は一年間の総まとめとして、悔いの残らない生活をしましょう。

さて、この時期は忙しく慌ただしい日々が過ぎていくことと思います。「忙」という字は「心を亡くす」と書きます。自分自身を見失うことなく、何が大切なのかを見極めながら生活してください。一方で、「多忙である」ということもあながち悪い面だけではありません。なぜなら、細かいことで悩んだり、人の陰口などを気にしている心の余裕がなくなるからです。そのように考えると多忙でスケジュールが過密であることは、精神衛生上でもよい面があると思います。しかし、多忙さのために「目標」や「目的」などの「事の本質」を見失うことのないように気をつけましょう。

「賢明であるためには、ひとつのコツがある。そのコツとは、何を見過ごすかを知ることである。」これは、アメリカの心理学者であり哲学者であったウィリアム・ジェームスの言葉です。(加島祥造著『英語名言集』(岩波書店、1993年)より)。つまり、見過ごすことのできる人間が賢明だということです。忙しい毎日であるからこそ、「目標」や「目的」などの「事の本質」を見つつ、無駄なことがあったときには、見過ごすことも賢い選択だと思います。

一方、皆さんは「臥薪嘗胆」という言葉を知っていますか。この言葉は、薪(マキ)に臥(フ)し、胆(キモ)を嘗(ナ)めるという意味で、中国の春秋時代の故事からきています。ある人物が薪の上に寝ながら、胆を嘗めて過酷な状況に耐えたことが背景にあります。現在では、自分の目標を達成するために辛苦に耐え、努力を重ねること。」という意味で使われているようです。

小学6年生と中学3年生は卒業が目前に迫っています。他の児童・生徒もあとわずかで上級学年に進級します。皆さん一人ひとりの目標の達成のためにも、何が大切で、何が本質なのかを見極めながら、臥薪嘗胆の心を持って3学期の残りの生活を頑張らしましょう。

# 年度末に向けて頑張っています

2月には中学3年生は上級学校の入学試験がありました。高校入試の過去問題を解くほか、入試のための課題作文に取り組みました。また、面接の練習や自己PRカード、自己申告書を作成し、各自の目標に向かって一生懸命に入試対策に取り組みました。その様子を目の当たりにした下級生も学年末考査に向けて、熱心に学習することができました。



さて、現在、つばさ教室では、進路先の学校や在籍校へ戻った時の生活リズムに慣れるために、50分間の学習と10分間の休み時間を決め、学習と休み時間の間に「礼」をする練習をしています。また、朝の登校時間に間に合うようにと、まずは9時30分までの登室を勧めています。その成果として、少しずつ、学習の時間と休み時間の区別をしっかりとつけたことで学習にも集中して取り組めるようになってきています。

今の段階から、学校生活に慣れておき、自信をもって新学期を迎えられるようにしましょう。

## 君たちはどう生きるか

今月は進学・進級を控えたみなさんに本を紹介したいと思います。吉野源三郎さんが著した「君たちはどう生きるか」という本で、80年以上前に書かれた作品です。主人公のコペル君は旧制中学校の2年生で、学校での出来事や、親戚の叔父さんとの対話を通して、自分は何を大切にし、どう生きていけばいいかという問いと向き合います。この物語には例えばこんな出来事があります。コペル君の友達の一人が上級生にいじめを受けそうになります。そこでコペル君を含む4人はみんなで立ち向かおう、友達が殴られるのならほかの3人も一緒に殴られようと約束します。しかし、上級生に困まれたとき他の友達2人は立ちはだかったのにコペル君だけは約束を守ることができませんでした。自分だけが友達を裏切ったと悔やみ、コペル君は寝込んでしまいます。こんなコペル君に叔父さんは言葉をかけます。「自分の過ちを認めることはつらい。しかし過ちをつらく感じるということの中に人間の立派さがあるんだ。僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから、誤りから立ち直ることもできるのだ。」その後、コペル君がどのようにするかは実際に本を読んでみてください。

この本は人として本当に大切なことは何か、自分はどう生きればいいのかを考えさせてくれる本です。つばさ教室の学習室に置きましたので、ぜひ読んで、自分はどう生きるか考えてみてください。

### ==== 3月の予定 =====

外国語活動	3月7日(水)、14日(水)	
体育活動	3月7日(水)、14日(水)	
遠足	3月13日(火)	押上、浅草方面に行きます。
調理実習・送る会	3月16日(金)	午前中に調理実習、午後小6・中3を送る会をします。